

## 生涯研修プログラム

### 3. パネルディスカッション

## 5. 肩甲難産

虎の門病院部長 佐藤孝道

肩甲難産は、頭位分娩において児頭娩出後、肩甲が通常の操作では娩出されない状態と定義され、頻度は全分娩の0.2~0.4%程度とする報告が多い。この異常は、児を死に到らしめるだけでなく、それを回避しようとして無理に肩甲を牽出すれば、上腕神経叢の麻痺を残すことになる。決して高頻度ではないが、とつきの的確な判断が要求される産科緊急疾患である。一方、肩甲難産で起こる問題は帝王切開ではほぼ完全に回避し得るので、予知できれば問題の多くは解決する。この

予知のため、肩甲難産のリスク要因とされる巨大児、分娩第二期遷延、母体の異常な体重増加と肥満、過期妊娠などとの関連について多くの研究が行われてきた。実地臨床に必要なのは、帝王切開をすべきか否かの的確な判断ができるような予知である。その意味で、正確な予知にはなお到っていないが研究は進展している。また、肩甲難産に遭遇した場合の緊急処置についても理論的な進展が見られる。